

【これは、小野しまと著『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』に収録できなかった章「ホットドッグ清潔作戦」です。前章「差別のない世界へ」に続きます】

## ホットドッグ清潔作戦

お金で手が汚れる

私は、紙幣がこんなに手を汚すとは思ってもみななかった。半日もお札を数え、硬貨を整理していると手が黒ずんでくる。その犯人が硬貨であるよりも紙幣であることにはすぐに気がついた。手にこびりついた匂いが、使い古された紙幣の匂いと同じものだったからである。何か青臭いといった感じだった。

ふつう、紙幣よりも硬貨のほうが汚れていると思われがちだが、硬貨のほうはむしろキレイで、紙幣のほうのはるかに多くの細菌を繁殖させていると言われる。このことは疫学的にも証明されているらしい。便器なども、乾いている面よりも湿っている面のほうが菌が多いそうだ。

私たちがこのことに気がついたのは、或る夏、義兄のホットドッグ販売を手伝った時のことだった。義兄の店では、夏の海水浴シーズンになると、浜辺に小屋を建てたり、海の家の一 corner を借りたりして、そこでホットドッグを作って販売するのが慣例になっていた。

ホットドッグを作る者と売る者とが別れている場合はいいが、一人で調理と販売を担当する場合、パンや食材をあつかうのと同じ手で、金を受け取ったり、数えたりしなければならない。

その対策として、調理をする時には薄手で透明なポリエチレンの手袋を着用し、金銭の受け渡しの時には手袋を外して素手で行うという方法を取っていたのだが、私たちが新たに問題にしたのは、紙幣による手の汚れをそのままにしておいてよいのかということだった。

そこで、ふと頭に浮かんだのが、消毒用のアルコール綿を詰め込んだ瓶だった。これを販売員に持たせて、必要などときには手指や道具類を消毒できるようにしたらどうかということを経兄に提案した。

「そんなことをしても大して役には立たないぞ」と義兄はあまり乗り気ではない様子だったが、とにかく私たちの意見を採用してくれて、全従業員にアルコールの瓶を持っていくように指示を出してくれた。

海岸の、人の集まる要所要所に作られたビュッフェでは、プロパンガスのボンベから燃料を供給し、ガスオーブンをを使ってウインナ・ソーセージを焼く。それを、あらかじめカレーで炒めておいたキャベツと一緒にパンに挟み、マスタードやトマト・ケチャップを塗り、半透明なポリ袋に入れてお客に渡す。

調理台の前には、水着姿の男女が集まって、渡されたポリ袋からホットドッグを少しずつ剥き出しては食べるのだ。一泳ぎしてお腹の空いた若者たちにモテて、けっこう人気があった。コーラもよく売れた。

だが、この作って売る流れの中での衛生管理が大変だった。水道の引かれていない場所が多かったので、ポリタンクに水を入れて用意してあったが、容量も少なく、これで頻繁に手を洗うわけにはいかなかった。

最初にガスボンベの栓を開き、コーラの瓶をアイスボックスに入れたりして外回りの準備を終えたあと、一度だけポリタンクの水を使って手を洗うことになっていた。

面白いことに気がついたのだが、何かにつけ神経質に手を洗うと、かえってお客に衛生状態を怪しまれてしまうのだ。こんな時はむしろ、お客にキレイ・キタナイを意識させないほうがいい。

調理の最中に手を触れなければならないものは沢山ある。ガスオープンのだアを開け閉めする取っ手、ウインナやキャベツを挟むためのトングと呼ばれる道具、パンに切れ目を入れるための包丁、マスタードやケチャップの入った瓶、できあがったホットドッグを入れる袋、等々であるが、これらはすべてポリ手袋をはめて処理することになっていた。

お金の受け渡しをする時は、急いでこの手袋を脱ぎ、素手で紙幣や硬貨に触れたあと、また手袋をはめて調理にかかるとの。手袋をはめた手でキレイなものに触れ、手袋を取った手でキタナイものに触れるというのが、開店の前後を含めて、絶対に忘れてはならない大原則だった。

しかし、これですべてがうまく行くと思ったら大間違いで、お客が混んでくると、手袋を取ったり、はめたりという一見単純な動作が思うようにいなくなる。

作業の流れと販売員の独白を、やや実況中継ふうに描写してみることにしよう。彼が最初に話すことは、調理服を着ることへの不満である。

手袋を着けたり脱いだり

《最初にしなければならないことは、エプロン付きの調理服を着て、丸形の白い帽子をかぶることだ。いくら暑くても、この格好をしないしていると後で罰金を取られるんだ。清潔をアピールするのがねらいらしい。だけど、海水浴場で仕事をするんだから、俺だって海水パンツだけでいたいよ。

あいかわらず低い椅子だね。ずうっと坐っていると腰が痛くなるんだよ。椅子に坐って真っ先にしなけりゃならないことは、えーっと、何だったっけ？ そうだ、ガスオープンの点火ノブと、のだアの取っ手をナプキンで拭くことだ。あっ、シマッタ、今日からアルコールで拭くように言われてたっけ。まあ、いいや。明日からということにしよう。

とにかく調理台は拭いておこう。いよいよ仕事の準備だ。ガスオープンの横に、キャベツ入りの容器とウインナ入りの容器を並べる。その横には、道具類の入った皿を置き、マスタードの瓶とケチャップの瓶を並べる。残った隙間には、できあがったホットドッグを入れるための耐熱ポリ袋を三、四十枚出して置く。

オープンの火加減もよくなってきたから、ウインナを入れることにしよう。おっと忘れてた。ポリ手をはめておかなくちゃ。これが大事なんだ。

ポリ手をはめた手で工具箱からマナ板を出す。工具箱のフタは閉めておかなくちゃ。でも、これは汚れているから、ポリ手をした手で閉めるのはまずい。手袋をいちど外さないとダメなんだ。え

い、めんどくさい。肘で押しておこう。

トングを道具皿から出して、ウインナを数本つまみ上げ、オーブンのグリルに乗せる。あっ、シマッタ、パンをまだ出していなかった。

棚の上からパンの箱を降ろさなければならない。あの箱はパン屋が運んできたままだから、ポリ手では触れない。手袋を脱いで、いちど素手になる必要がある。それも両手ともだ。なにしろ、大きな重い箱だから片手では降ろせないからね。

どっこいしょっと。あれ、パンは素手ではつかめないだった。もういちどポリ手をはめなくちゃ。えーと、ポリ手はどこに置いたっけ。調理台の上だ。おっと、調理台にキタナイ素手のままで手を突いてはいけないんだ。

それに、汚れた指でうっかり手袋のキレイな部分を持ってしまったら大変だ。はめる所に指だけ突っ込んで、こっちの手で隅をつまんで引っ張る。両手にはめるのは難しいから、片手だけにしておこう。

パンを箱から出して調理台に乗せるのだが、片手で一本ずつ運ぶしかない。一本、二本、三本と、パンの数だけ行ったり来たりだよ。

おっと、パンの箱を棚に戻しておかなければ。足元が邪魔だからね。片手のポリ手を外してっと。シマッタ、ポリ手をアイスボックスの上に置いてしまった。いちばんキタナイ所だ！

さあ、もういちどポリ手をはめて、ウインナの焼け具合を見ることにしよう。あれっ、もうお客さんの到来かよ。六本焼いてくれだっ。ウインナを一本追加だ。ついでにもう五本入れておこう。包丁でパンに切れ目を入れて、カレー炒めのキャベツを挟んで、と。えーと、注文は何本だったっけ。

ちょ、ちょっと待ってよ。いまお金を出されたって困るよ。とって、無視するわけにもいかないし。いまポリ手を外すから待っててね。うわっ、そんなところへお金を置かれちゃ困るよ。そこはキレーな場所なんだ。

えーと、千円札だからお釣りはこれだけっと。助けてくれ、ウインナが焦げそうだ。ポリ手をはめ直すヒマなんて、ないよ！

何だっ、一緒にコーラをくれだっ？ また手袋を外すのかい。アイスボックスはいちばんキタナイんだよ。コーラの瓶だっ、コーラ屋が持ってきた時は埃だらけだったからね。おやおや、瓶を拭いたら、ナプキンが真っ黒になってしまった。代わりのナプキンはどこにあったっけ。

シマッタ、コーラの瓶を調理台に乗せて栓を抜いてしまった。おまけに栓抜きを道具皿へ入れてしまったよ。これはキタナイ道具だから置く場所が違うんだ。まあ、とにかく出しておこう。あっ、包丁を素手で持ってしまった。

困ったぞ。力を入れてコーラのフタを開けたとたんに、帽子がずれ落ちてきた。帽子はキタナイ手で触るなど言われてるが、しかし、待てよ。ポリ手で帽子に触ったら、お客は何と言うだろう。俺の髪の毛にだって触るよ。それでホットドッグをいじったら、お客は怒るに決まってる。

あれれ、汗も流れてきたよ。オープンの前は熱いからかなわないね。顔を伝って調理台に落ちそうだ。えい、腕で拭いてしまえ。帽子も両腕で挟んで、こうやって直せば簡単じゃないか。ポリ手を外さないでも巧くいったよ。

はい、できあがりしました。あれっ、次のお客がなんか言ってるね。三本注文？ ちょっと待ってよ。さっきのお客さん、コーラの払いはまだだったね。ポリ手を外して金を受け取らなくちゃ。何本コーラ渡したっけ。えっ、まだ貰ってないって？ あっ、ここに三本置きっぱなしだった。

女の人が手を差し出しているけど、ほんとに連れなの？ 渡していいんだね。紙コップを瓶にかぶせるとキタナイから、別々に渡せと会社から言われてるんだ。おや、この女の人、不機嫌そうな顔してるね。あれれ、自分で紙コップを一つずつ瓶にかぶせているよ。

最後にヒステリーを起こして、持ちやすいようにしてよ、なんて叫んでいたが、お客の清潔観念なんて、まだまだあんな程度なのかなあ。

あっ、シマッタ、釣り銭を出したあと、素手のままパンと包丁をつかんでしまった。オープンの取っ手にも触ったし、トングも持ってしまった。えっ、なに、誰かコーラを一本くれと言ってるね。それじゃあ、ポリ手をはめなくちゃ。おっと、待った。このままでよかったんだ》

こういうことが延々と続くのである。それも、お客が立て込んできたら、こんなテンポでは済まなくなる。調理と販売の速度が急ピッチになり、手数も増えるし、作業に追い立てられて、ますます混乱はひどくなる。途中でパンやコーラを補充することにでもなれば、ポリ手を脱いだり着けたりと大わらわだ。

この大変さは、この仕事を実際にやった者でなければとうてい分からないであろう。キレイ・キタナイの切り替えに追われて、頭がおかしくなりそうだと叫んだ販売員がいる。途中で、エイとばかりに手袋を放り出してしまいたいような衝動に駆られるそうだ。

私は、妻の運転する車に乗って、よく見回りに行ったが、衛生指導を守らないと言うよりは、守れない販売員がかなりいたように思う。手袋を調理台の片隅などに放り出したまま、もうパンであろうが、お金であろうが、素手でつかみまくっている現場を発見するのだ。

こちらが文句を言おうものなら、彼らの恨みのこもった目とフクレっ面が返ってくるのを覚悟しなければならぬ。

清潔と不潔の原理を導入し、ポリエチレンの手袋を加えただけでもこの始末である。そんなところへ、さらにアルコール綿の瓶を渡したのだから、それが失敗に終わることは目に見えていた。

販売員の誰ひとり、いそがしい調理と販売の合間をぬって、新顔のそんな瓶と付き合っている余裕はなかった。仕事から戻ってきた彼らの瓶を見ると、フタを開けた形跡すらなかった。

ポリ手と素手の切り替えだけでもキリキリ舞いしている彼らに、これ以上「アル綿」の使用を強いることはできなかった。そんなことをやろうものなら、彼らはおそらく発狂するか、あるいは大反乱を起こしたであろう。

それでも几帳面に瓶だけ持って出かける従業員もいたが、いつのまにか、見捨てられた瓶が私たちの机の上に列をなしていた。

## ㄥㄥ夜はネズミの運動会

こうして、私たちの思いつきは完全な失敗に終わったわけであるが、この経験によって明らかになったことがひとつあった。それは、清潔な食べ物を人々に提供することがいかに難しいかということである。

作る者や売る者がいくら頑張っても、人間の処理能力には限界があるし、また人々の清潔の意識にも多くの盲点があって、なかなか思うようにはいかない。

販売員のモノログにもあったように、コーラの瓶と紙コップを別々に手渡して、無接触の方針を貫こうとしても、なんでそんな面倒くさいやり方をするんだとばかりに、不機嫌な顔をする客もいる。確かに、ホットドッグや瓶を両手で運んでいく立場からすれば、気の利かない売店だということになるであろう。

最近、日本人の清潔好きが云々され、その清潔志向が、過度にキレイな社会を造り出してしまったと言われている。

しかし、食品販売の現場を見てきた私たちから言わせると、現実にはまだまだそんな域にまでは達していないし、人間の限られた能力では手の届かない領域がいくらでも残されているのである。

私たちがこの仕事を手伝ったのは、もうずいぶん前のことだが、その後、人々の日常的な行動様式や清潔観念にコペルニクスのような転回があったとも思えないし、社会全体がそんなにめざましくキレイになったとも思えないのである。まだまだ旧態依然としたものはいくらでも残っている。

たとえば、今でもときどき、炊事場や店内が深夜ネズミの運動場になっているような「高級」レストランや「高級」ホテルの存在が報告されているが、こういう現象は、あの頃とまったく変わってはいないのだ。

私たちが手伝っていた頃にも、海岸のレストランや海の家に、夜になるとネズミの群れが出没するという噂は立っていた。義兄の店でも、調理台やオープンにカバーをするなど対策を講じていたのを覚えている。

こういうことは、古い時代の、衛生設備も不十分な海岸で、仮設小屋に近い売店で行う商売だから生じるという問題ではなく、都市の中心部や周辺にあつて、十分な設備を整え、時代の最先端を行くような店においても生じうる、優れて今日的な問題だと言える。

先ほど実況を描いてみせたホットドッグの売店に、最近大いに流行している抗菌グッズを採用したらどうなるであろう。販売員がいつそう混乱することは目に見えている。何がキレイで、何がキタナイかということの判別がますます難しくなるからである。

それに、抗菌グッズの使用は、汚れた手でいくらそれに触っても、もともと殺菌されているからいいではないか、という怠慢さにも結びつく。

私たちは、実のところ、清潔・不潔の区別も定かでない世界に、今もなお片足を突っ込んでおり、そこではただ、行き当たりばったりの、いい加減な直感に頼って行動するしかないのである。

結局、真にキレイなものを人々に提供できる、真にキレイな社会を実現するのは、蓄積された衛生技術でも薬剤でもなく、清潔と不潔を正しく分別し、それを行動に結びつけることのできる、人々の実践をおいてはない。

人々の正しい実践によって、いま述べたようなさまざまな問題を解決しないかぎり、私たちの社会は、まだまだキレイと言われる段階にあるとは言えないであろう。

殺菌剤や消毒剤の濫用とか、抗菌グッズの流行など、一部に病的な逸脱現象が見られるとしても、それによって真に清潔な社会が実現しているとは思えないし、また、本来人間が有する清潔志向に責任があるとも思えないのである。

ネズミの活動ということ为例にあげたが、それについては、直接現場を見たわけではなく、また、人気のない深夜のレストランの内部を覗く機会もなかなか得られるものではないので、もっぱら新聞やテレビの報道に頼るしかない。

しかし、最近も、それを想像させるような光景には実際に何度か出会っている。そのうちの特に印象の強かった例を二つほどあげておくことにしよう。

一度は、或る湖の畔にある日本料理店で、なんと私たちが食事をしている最中に、ハムスターのような巨大なネズミが一匹、店内に走り出てきたのだ。あんなのが棲んでいるかぎりには、仲間も相当数いて、夜中にはさぞ派手に騒ぎまくっているだろうと思ったものである。

もう一度は、日本ではなくフランスの例であるが、パリ東駅の近くにある有名なレストランに招かれた時のことである。この界限は、風紀の悪そうなごみごみした街並みで、地図を頼りに一本の路地に入ってしばらく行くと、石の門が現れる。

果たしてこんな所にあるのだろうかと思いながら、石の門をくぐって構内に入り、少し歩いたところにその店があった。フランス各地や日本にもチェーン店のある有名レストランとは思えないほど、汚れた、みすぼらしい外観だった。

私たちは夕方、街が暗くなりかけたころ行ったのだが、店の周囲の排水路を見て驚いた。丸々と肥った大きなネズミが何匹も走り回っていたのだ。

レストランの内部は、古い装飾や食卓が並んでいたが、さすがに伝統を感じさせる立派な造りだった。友人たちと食事していると、三、四人のギャルソンがハッピー・バースデーの歌を陽気に歌いながら、蝋燭の灯った大きな盆をかついで奥から出てきた。

今、彼らがそうやって店内を行進している姿を思い出す時、私はなぜか、あのネズミたちの群れを同時に思い出してしまうのである。

おそらく、この店は、深夜になるとネズミたちの遊び場になっていたのではないだろうか。人間たちの歓楽の音が消えたあと、今度はネズミたちの饗宴だ。

あれほど大きな、栄養の良さそうなネズミたちが、店の周囲の排水溝だけで命をつないでいたとは、どうしても思えないのである。

私たちがメニューの扱いに神経質になる理由は、実はこんなところにもある。ネズミたちが滑り台にして遊んだかも知れないメニューを、フォークやナイフの上にじかに置かれてはかなわない、という気持ちもどこかにあるのだ。

こういう世界が存在するかぎり、日本にせよ、欧米にせよ、真にキレイな社会の実現にはほど遠いと言えよう。しかし、私は、矛盾しているかも知れないが、こういう世界がまだ残っているというところに、何とはなく安心感を覚えてしまうのだ。

フランスでの経験や母の生き方からも学んだように、人間どうしの結びつきを可能にする直接性を失ってはならない。だが、それと同時に、清潔に生きようとする自分自身の場を、そこに見いださなければならないのだ。日々の挑戦の場が残っていてほしいという感情もどこかにあるにちがいない。

#### ㊦ 拭きマニアから清潔マニアへ

ホットドッグ販売の現場担当者にアルコールの瓶を持たせようという私たちの試みは、見事に失敗に終わった。しかし、私たちの手元にはたくさんのアルコールの瓶が残った。

その瓶の一つを、妻がハンドバッグに入れて持ち歩くようになったのである。清潔マニアの誕生だった。綿を出しては、自分たちの手指を拭くことが習慣になっていった。

最初は、いろいろな発見があった。仕事のあとで手を拭くと綿が真っ黒になるのは当然だが、妻の手は車のハンドルを握っているだけでも黒くなった。さらに、何もしないで助手席に坐っているだけでも黒くなることを発見した。

外の世界って汚れているんだなあ、というのが私たちの実感だった。なんだか取っつかれたように拭きまくった。妻は、車のハンドルを拭き、ギヤーを拭き、座席を拭き、フロントボードを拭いた。

最初は、清潔マニアと言うよりは、拭きマニアと言ったほうがよかったかも知れない。なにしろ、暇さえあれば何かを拭いていた。従業員には見向きもされなくなったアルコールの瓶を、早く片づけようという気持ちがどこかにあったことも否めない。

まずは自分たちの身の回りの世界をキレイにしようということから出発し、こうして、徐々に拭きマニアから清潔マニアへと格を上げてきたのであるが、ポリ手袋を使うだけでも、あれだけの行動を組み立てる必要のあった販売員の例を見ても分かるように、私たちの生活もたいへんドラマティックなものへと変わっていった。

清潔か不潔かということを中心に自分でシナリオを書き、それによって行動を組み立てることをドラマティックと呼んだのであるが、サルトルのように「演ずる」と「生きる」とを同一視するならば、私たちの生きる道、私たちの人生は、今や清潔を中心に展開し始めたと言えよう。

それは、二つの価値観によって生きることである。清潔と不潔の価値観にしたがって、あれは清

潔だ、これは不潔だと決定していくのであるから、その生きる行為は、価値を知ることと決定することの両方の意味をもっている。

何が清潔で何が不潔かということを知りつつ、その清潔なものを選んでゆくのであるから、それは、自分自身にとっての、清潔と不潔に色分けされた世界を創り出していくことにほかならない。

清潔マニアの生活は、かくして、ドラマティックであるとともに、創造的でもある。それは、美と醜、善と悪、真と偽の追求と相通じるものをもっているのである。

[2007/09/01 magmag]